天象用語解説 1

24 節 気

時を数えるのに，バビロンでは1日を 12 分割し，エジプトでは 24 に分けていました．又惑星や月，太陽の位置を表わすのに黄道 12 宮というものがあります．意味と使い方が違いますが，中国で考えられ，日本に入ってきたものに 24 節気と 10 干 12 支があります．

月は朔から，だんだん太っていって，上弦，望となり，欠けながら下弦となり，次の朔になるまで約 29.5 日かかります．この周期を1朔望月といいます．太陽は1周して，もとの位置にもどるまで1年，365 日と少しかかり，季節の変化を表わします．そして，1太陽年は約12朔望月と 11 日にあたります．

日を数えるのには，1周期が短かくてわかりやすい月が便利ですが，12 朔望月は 1 太陽年より少し短かいので，何年もたつと季節と暦日がだんだんずれていきます．それで，季節と大きくずれないように閏月を入れて1年の長さを調節しました．それでも1カ月近くの差がでますから，24 節気—1 太陽年を 24 等分した約 15 日にあたる—を暦に書きしるして，季節の目安としました．又閏月を入れる時の規則にも用いられました．これが太陰太陽暦と呼ばれるものです．ですから 24 節気の節名は季節の移り変りを表わす言葉が付けられています．けれども実感として，日本の気候とは必らずしも一致しないようです．例えば，立春，立夏，立秋，立冬とは，それぞれ，春，夏，秋，冬の気が立つという意味を持っていますが，立春は2月4日頃で寒い時です．

現在使われている暦は太陽暦ですから，毎年暦の日と季節がずれるというような事はありません．それで，24 節気も名前だけが残っています．今では，黄道上の太陽の位置を表わす為にある黄経に，それぞれの対応した節名のところに太陽が入る時刻を表わすのに用いられています．それを1つ1つ表わした表が次のものです．なお，春分，秋分に入る時は特別に，春分の日，秋分の日と国民の祝日になっています．

節　名	黄経	備　考
春分（しゅんぶん）	0度	天の赤道と交わり，太陽が南から北へ進むところの交点
清明（せいめい）	15	
穀雨（こくう）	30	
立夏（りっか）	45	
小満（しょうまん）	60	
芒種（ぼうしゅ）	75	
夏至（げし）	90	
小暑（しょうしょ）	105	
大暑（たいしょ）	120	
立秋（りっしゅう）	135	
処暑（しょしょ）	150	
白露（はくろ）	165	
秋分（しゅうぶん）	180	太陽が北から南へ進むところの赤道との交点
寒露（かんろ）	195	
霜降（そうこう）	210	
立冬（りっとう）	225	
小雪（しょうせつ）	240	
大雪（たいせつ）	255	
冬至（とうじ）	270	
小寒（しょうかん）	285	
大寒（だいかん）	300	
立春（りっしゅん）	315	
雨水（うすい）	330	
啓蟄（けいちつ）	345	

24 節気と太陰太陽暦については，次の本に紹介されています．

藪内　清著「中国の天文暦法」 平凡社　昭和44年
内田正男著「暦と日本人」 雄山閣　昭和50年
広瀬秀雄著「暦」 近藤出版社　昭和53年

（伊藤節子）